

# 東京古田会ニュース

—古田武彦と古代史を研究する会— No.220 Jan.2025

http:// tokyo-furutakai.com/

e-Mail: saitaka7078@yahoo.co.jp

代 表: 安彦 克己

編集発行: 事務局 〒212-0024 川崎市幸区塚越3-370 斎藤 隆雄 TEL/FAX 044-522-7500

郵便振替口座 00110-1-93080

年会費 4千円

口座名義 古田武彦と古代史を研究する会

## 目次

### 古田氏の旧説撤回問題（上）

世田谷区 国枝 浩

\* 古田氏の旧説撤回問題（上）

世田谷区 国枝 浩

\* 「難波の宮」発見逸話

山根徳太郎氏の苦難

京都市 古賀達也

\* 古田武彦記念古代史セミナー

2024報告

日野市 橋高修（文責）

⑧

\* 富雄丸山古墳の被葬者は宮崎から嫁いだ者で、蛇行剣は贈答品か

吉川市 堀口啓一

⑪

\* 古代史エッセー83

日本国号と禪軍墓誌

日野市 橋高修

⑫

\* 「東日流の旅」に参加して

仙台市 広幡文

⑬

\* 花の女子旅雪中行軍（四人旅）

寄居町 山田まゆみ

⑮

\* 和田家文書備忘録10

弘前市相馬の長慶天皇陵

港区 安彦克己

⑯

\* 古代史コラムNo.1  
「大作家」A.I.と会話して

世田谷区 國枝 浩

⑰

\* 「東京古田会」月例会報告⑨

文責 新保高之

⑲

\* お知らせ

るのか」という気持ちにさせられる、そのような場面にたびたび出会うからである。また、あつてはならないことであるが、二つある古田氏の説のうち、「自分にとつて好都合の説を探用して、もう一方には触れない」論考も散見する。この問題点については別稿で議論する予定である。

## はじめに

この論考は古田氏の学説を単に批判するという過去に向かった議論を目指すものではない。古田武彦氏という影響力が大きい研究者の説が、日本の古代史における極めて大事な事項について二つ（ないし三つ）の回答を与えていたことに対しても注意を喚起するものである。というのも、古田氏の学説を支持する研究者が、「古田説によると」、「古田氏が」と述べていることに基づけば、などの言葉を安易に使うことができないという問題を孕んでいるからだ。二つある古田氏の説のうち、「どちらの説を支持するのか」を明らかにしなければならない状況が確実に存在する。それだけではない。二つの回答が提出された問題について、「古田氏の一方の説を支持する」場合には、「なぜ一方を支持し、他方は支持できないかの根拠」も示さなければならぬからである。古田氏を支持する研究者が、何らの理由も示さないで一方の説（旧説の場合もあれば、新説の場合もあるが）に基づき議論を始めているのを見ると、その「せつかの論考をそれ以上は読む必要があ

る」という気持ちにさせられる、そのような場面にたびたび出会うからである。また、あつてはならないことであるが、二つある古田氏の説のうち、「自分にとつて好都合の説を探用して、もう一方には触れない」論考も散見する。この問題点については別稿で議論する予定である。

同時に古田氏の議論の中で、氏自身が旧説に問題点があつたことを指摘し、新説を提示している場合もあるが、旧説の撤回の表明もなく、また旧説撤回の理由も明示されないで新説が登場する場合もある。さらに、その中には氏による旧説も新説も共に論拠不十分で支持することができないという場合もある。この論考で取り上げるのはこちらの問題である。

古田氏の思考は柔軟であったのである。「ああも考えられる」など幾つもの可能性を見出し、それらから取捨選択し、その上で可能な解決法を提示していたのである。読者や講演などでの質問や、提案などにも耳を傾けたりもした様子もうかがえる。

私は古田氏のことを、特に問題提起者としての側面を高く評価している。通説なども含めて、通常は当たり前のことをとして等閑視してきた、しかし深く究明しなければならない日本古代史の諸課題を、解決の道を

見つけることがどれだけ困難であろうとも提起し、解決の可能性を複数個考察し、「現時点ではこれがより合理的な解釈だ」として提示していったのであろうと思われる。

大事なのはこうであろう。古田氏は可能な解決法を複数個提出した問題が幾つかあつたということ、そしてそれらの問題は古代史上の難問であつたこと、その事実は踏まえなければならぬ。それらを氏の混乱として捉えるのは容易である。しかしそれは消極的な姿勢に過ぎない。私たちは古田氏から問い合わせられてゐるか」と。そのように受けとめる必要があると私は考えている。

また、当然のことながら氏の提示したそれの解決の成否も見極める必要があるだろう。さらに、問題に解決方法もあるのではないか、また氏が提起していなかつた古代史の課題が存在するのではないか、など。私たちの研究意欲を搔き立てる研究材料として氏の「旧・新両説問題」を受け止めたいと考えている。

以下の一、二、三、五、六、七、八では①が旧説、②が新説とした。また、四、では①、②が旧説、③が新説にあたる。ただし、氏が自ら旧説を撤回し、新説を提示している場合を除けば、

どの説が旧説または新説かについては、厳密なものではなく、私の判断で分類したに過ぎない。大事なことは、幾つかの問題で古田氏によつてそれ二つ（ないし三つ）の説が提出されていることを指摘し、その両説の検討を行うものである。

紙幅の都合上、一・から四・までが本稿の（上）、五・から八・は（下）で論じることになる。

（上）古田武彦『古代史の十字路—万葉歌の（上）』、（下）古田武彦『古代史の十字路—万葉歌の（下）』、（上）古田武彦『古代史の十字路—万葉歌の（上）』、（下）古田武彦『古代史の十字路—万葉歌の（下）』

第一刷 55頁

（注2）同書 72頁

（注1）古田武彦『古代史の十字路—万葉歌の（上）』、（下）古田武彦『古代史の十字路—万葉歌の（下）』

（台）国はどこにあるかという問い合わせして、八幡平（はちまんたい）だと答えるかもしれない。八幡平は「やまた」とも読めるよ」と。さらに、原典の「山常」、「八間跡」は固有名詞であるとも、普通名詞であるともいえるだろう。

（一）万葉歌 第一巻第二歌 山跡、八間跡の読み方と意味

次の（）の中の読み方は何でしようか？

山常庭 村山有等 取与呂布

（）には 群山あれど とりよろぶ

天乃香具山 謄立 国見乎為者

（）には 群山あれど とりよろぶ

天の香具山 上り立ち 国見をすれば

国原波 煙立竜

（）には 群山あれど とりよろぶ

国原波 煙立ち竜

（）には 群山あれど とりよろぶ

海原波 加万目立多都

（）には 群山あれど とりよろぶ

海原は 煙立ち立つ

（）には 群山あれど とりよろぶ

怜可国曾 蜻嶋 八間跡国者

（）には 群山あれど とりよろぶ

（注1） うまし国ぞ あきづしま（）の国は

（）には 群山あれど とりよろぶ

（台）国はどこにあるかという問い合わせして、八幡平（はちまんたい）だと答えるかもしれない。八幡平は「やまた」とも読めるよ」と。さらに、原典の「山常」、「八間跡」は固有名詞であるとも、普通名詞であるともいえるだろう。

② 氏によつて理由が挙げられるこ  
となく、旧説を無視して出現した説  
である。『九州王朝の歴史学』（駿々  
堂 153頁）、ミネルヴァ書房  
128頁）では、「ヤマト」と読め  
る文字の例として、「山跡」と共に「山  
常、八間跡」が挙げられている。氏が  
どういう根拠で持ち出したのかも不  
明であるし、私にとつても説明のし  
ようがない問題である。ここでは、旧  
説①から新説②への変更についての  
根拠は示されていない、と指摘する  
にとどめたい。

## 二、万葉歌「前書き」についての資料 批判、その履行と不履行

①先に取り上げた一・の万葉第二歌  
における歌の前書き批判についてで  
ある。『古代史の十字路』ではこう語  
られていていた。

「私の方法によつてみよう。」前書き  
は第一史料として、歌の「前提」と  
せず、第一史料。直接史料としての  
〈歌〉自身を精視する。この方法だ」  
と。そして、氏の主張の要点だけを簡  
潔に示す。通説的には、この歌の前書き  
には舒明歌である、そこで「山常、  
八間跡」という歌詞が「やまと」と  
読める。疑いもなく、この歌は近畿や  
マトで詠われたものだとされてきた。

これに対して古田氏は、近畿ヤマ  
トの「香久山」が歌の天の香久山に相  
応しくない、海原もない、他の場所で  
詠われたはずだという強い確信のも  
とに、大分の鶴見岳こそこの歌の歌  
われた現場である、したがつてこの  
歌の作歌者は舒明天皇ではないと結  
論付けた。さらに氏による前書き批  
判は続くが、ここでは省略する（注2）。  
②ところが同じ著作、『古代史の十字  
路』で万葉第三歌ではどのように語  
られているか。ここでは自分の「方法」  
であるはずの資料批判が  
行われていない。つまり、第三歌が舒  
明天皇に関係する歌だという前提で  
議論が開始されているからだ（注3）。  
また2000年1月の講演、「壬申の  
乱の大道」（注4）でもこれと同様に万  
葉第三歌は舒明天皇が登場する歌と  
して議論が進められている。

それは何故か。「第二歌の前書きに  
「舒明天皇の歌」とあつたからに他な  
らない。その「流れで」作歌者が書か  
れていない第三歌も舒明天皇に関わ  
る歌とされた。前説撤回どころの話  
ではない。同一の著作中の出来事で  
ある。自説についての物忘れの類で  
ある。同じ著作であつたとしても、各  
論文あるいは各章の執筆時期はかな  
り違つていたのかもしれない。だか  
ら、章が異なると、他の章の内容を失  
念するということなのか。あるいは

想像するに、古田氏は研究、執筆、講  
演、質問への回答、インタビュートと多  
忙ではあつただろう。がしかし、学説  
については「忙しかつた」では済まさ  
れないし、また以前に書いたことを  
忘れて以前とは異なる「学説」を展開  
し書いた、などということがあつて  
はならないことである。「前書きに對  
する資料批判」を厳格に行うか否か  
などは、研究者の根本姿勢、思想その  
ものに關わるものである。

私はこれを「同じ著作内部で起こ  
つた旧説撤回」と呼ぶ。

（注1）『古代史の十字路』第三章 豊後なる  
「香久山」をさかのぼる 48頁

（注2）同書 196～214頁 第八章

（雷山の絶唱）では、万葉卷三、二三五歌の  
柿本人麻呂歌、雷岳歌が取り上げられ、前書き  
などへの資料批判が行われている。近畿ヤ  
マトで詠われている歌ではなく、福岡県にあ  
る雷山での歌とされる。

（注3）同書 第七章 太宰府の「中皇命」

（注4）「壬申の乱の大道」第三章、この講演は  
活字になつてない。以前は、「古田史学の会」  
のHPで閲覧可能であった。

## 三、東鰐人の居所、東鰐人の国は銅鐸 圈に相応しいか

① 東鰐人は銅鐸圈にいた

この論証方法は、かなり荒っぽい  
と言わざるを得ない。弥生時代は何  
百年と続く。弥生の後半でも三百年  
はある。弥生時代だから時期が同じ  
とは言えない。また、時期がピタリ一  
致していたとしても消滅・消失が偶  
然の合致ということも当然、ありう  
る。例えは弥生時代における寒冷化  
によって二つの勢力が衰退するなど  
も考えられる。十分条件が満たされ  
たに過ぎないともいえる。「逆は真な  
らず」、ということである。歴史の中  
に同じ時代に誕生し、また同じ時代  
に滅亡した文明・文化はあるだろう。  
「時代が同じということをもつて同  
じ事象とはこれ如何に」。

（注）『邪馬臺國の論理』 銅鐸人の発見  
突然消えた二つの存在 ミネルヴァ書房  
2010年代刷 239頁。また、244頁  
には、銅鐸の「東鰐人」という見出しさえ設  
けている。なお、私は東鰐人の国という意味  
で「東鰐国」と記すことがある。

拠

イ. 地理的状況は対応しているのか。

以下の問題もある。『漢書』地理志は書く。「東鯨国は呉地・会稽から東」と。東鯨国については距離が書かれていない。名前から言えば方角は「東」であろうか。

「鯨」は、魚ヘンに「是」。「是」は「ここ」、あるいは辺・端。古田氏は「一番端つこ」と考える。魚を中国に貢献した、東の端つこの国ではないか、と古田氏(注)。魚を中国に献上したということは海岸に近いところになるだろう。

(注) 同書 229頁

会稽から東に進み、その「一番端つこ」ということは九州も可能になる。

会稽郡は南北に長い。場所が特定さ

れているわけではない。三国の時代

の建業(西晋の時代の建鄴、後の南京

から東を見れば、宮崎・鹿児島の東側

の海岸が「一番端つこ」になる。四国

の東端も可能。高知、徳島の東岸の辺

りか。近畿ヤマトを囲む地点では、し

「一番端つこ」には相応しくない。魚

とのかかわりについても相応しくな

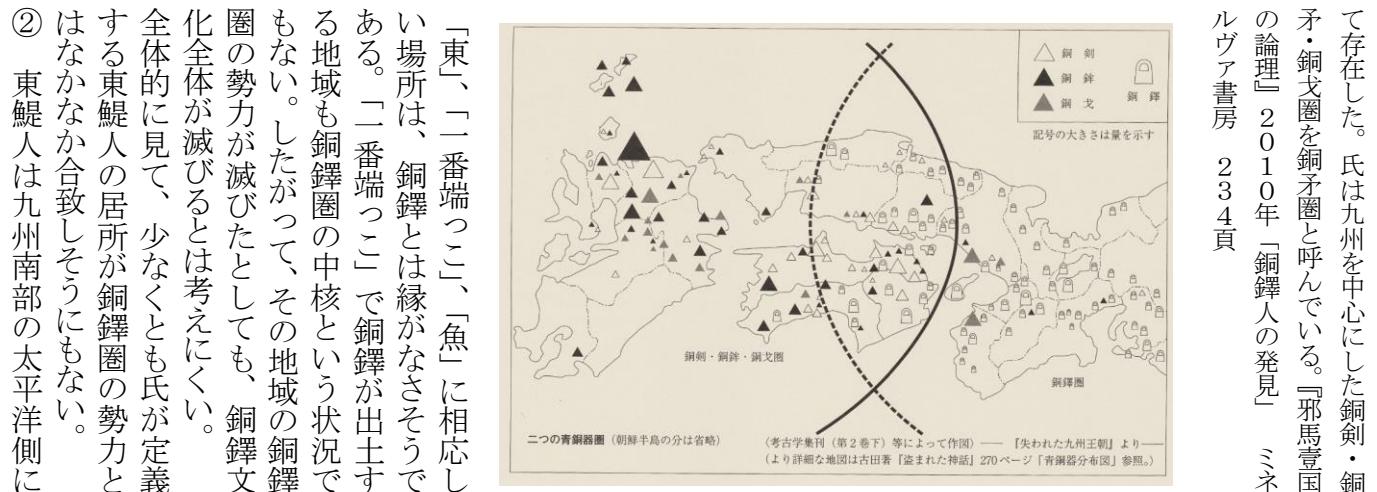
い。紀伊半島の東岸が魚に縁があり、

また「一番端つこ」に相応しいか。し

かし、この地が銅鐸の中心地という

わけにはいかないことは次の地図が示している。

(氏によって提示された地図)



いた

しかし別の著作では(注)、古田氏は「東鯨人」を近畿の銅鐸国家に当ていた時期があつたが、これを撤回して、九州(特に南九州)の東岸部を中心とした領域(宮崎、鹿児島の太平洋側)の人々という新説を打ち出した。これにより東鯨人は銅鐸圏とは無縁になってしまった。これについては、前説の何が問題で撤回されたのか、またなぜ新説に移行したのかが不明瞭である。

(注)『古田武彦の古代史百問百答』 IIIの8 「東鯨国の献見」について ミネルヴァ書房 45頁

#### 四. 狗奴国の場所

『古田武彦の古代史百問百答』 III 10

「狗奴国に關する説の変遷について」(47~49頁)で、古田氏は率直に自身の見解の変更を述べている。①、②が旧説、③が新説。

①最初は「邪馬壹国の南」としていたが、これは不注意によるものだとされる。

②読者からの指摘で→『後漢書』倭伝(注1)により、倭国の「東」に短里で千余里に変更。瀬戸内海領域と考

く(注2)。狗奴国は女王国から東に長里(短里の約六倍)で千余里に変更。博多湾岸から東に長里での千里で大坂府の茨木市・高槻市あたり。当時の「銅鐸圏の中核部」となる。「狗奴」は「この」と読む(注3)。茨木市の東側、枚方市には「高野(この)山」、京都府の舞鶴湾近辺には「籠(この)神社」がある。

古田氏の最終的な見解は③と思われる。ここでは、自説変更の経緯は語られている。しかし、古田氏の下した判断、「後漢の時代は短里ではなく長里」という説明が理にかなっているか否かは別の問題である。

(注1)『後漢書』倭人伝の范疇は述べる。自女王国東渡海千余里 至狗奴国 狗奴

国は女王国より海を渡つて東へ千余里

(注2)合田洋一氏との会話の様子は、『古代に眞実を求めて』第六集 『神話実験と倭人伝の全貌』 41頁で語られている。

(注3)『魏志』の「狗奴」や『後漢書』の「狗奴」を「この」と読めるか否かは一つの問題である。別稿で論じてみたい。

このでの氏の説明の妥当性、帰結

の意味について簡潔に述べておく。

一つは、『後漢書』倭伝には「二の里程が記されている。楽浪郡から倭国まで万二千里で、これは陳寿と同じなので短里。女王国から狗奴国までが千余里。

しかし、氏によると前者は短里で、

後者は長里。漢の時代には「長里が使われていた」というのが根拠になつてゐるようだが、それでは前者を短里という解釈は反故にされるのだろうか。これは同じ史資料内の記述としては混乱の元でしかない。一方が短里ならば他方も短里、一方が長里ならば他方も長里でなければいけないだろう。私は共に短里と考えてい

とでカレーやお茶を自國に根付かせ、エジプトから持ち出されたロゼッタストーンが大英博物館に展示されていたような事態は起こつていない。ということは、九州の銅矛圏は、近畿の銅鐸圏を征討支配していなかつたことを意味している。むしろ両者は没交渉であつた可能性すらあるだろう。（下に続く）

## 「難波の宮」発見逸話

## 太郎氏の苦難 京都市 古賀達也

## 一、教え子からの寄附に涙する

二つは、九州勢が近畿ヤマトを制覇していない根拠が、皮肉なことに先の氏の提示した地図にも示されている。この地図はいつの時代のものであろうか。発掘調査が行われた近現代の考古資料に基づくものであろう。ということは、弥生時代のものそのものではない。つまり、もし九州中心の銅矛勢力が近畿中心とする銅鐸勢力を征討し支配していたとすれば銅矛勢力が銅鐸の勢力を支配した後の状況を温存しているはずである。すると支配勢力の文化、銅矛類は近畿地方にまで伝搬されていなければならないだろう。しかし、銅矛は近畿から出土していない。

拙宅の書架整理により不要となつた蔵書を古書店に売却し、得られたお金で山根徳太郎著『難波の宮』(学生社、昭和三九年)を購入した。六十年前の本なので論文執筆に役立つことはあるまいと思い、これまで読んでこなかつたが、古書店にある同書が気にはなつていたので、購入することにした。

## 一、教え子からの寄附に涙する

い。学者のなかでも、現在までの成果では、難波の宮と認めず、わたしたちの努力を否定しようとする方も少なくなかつた。(中略)

問的成果には、深く心に期するところがあつたが、ホトホト弱つたのは、研究資金の不足であつた。（中略）

そのころ、昭和三十一年十月十日の日、京都のわたしの宅に史泉会（大坂商大関係の歴史研究者の会）の古い会員の方が見えて、なつかしい昔話の後、封筒をつたしの前でさし出

した。

「先生、これは先生が難波の宮の発掘資金にお困りになつてゐるのをみ

難波宮発掘と遺構保存に至る山根徳太郎氏の功績は、大阪歴博の特別展(注①)などで知つてはいたのだが、

同書を読み、発掘費用不足や学問的に有力な批判に山根氏が苦慮していたことがよくわかつた。なかでも、発

掘費用調達に山根氏が困っていたとき、教え子たちから寄附がよせられ、た次の逸話を読み、胸が熱くなつた。

ないとぼくは受取れない」（中略）  
この後、わたくしは、それらの人間に会うたびに名前を知らせてくれるよ

うに、幾たびか申出た。そして翌二年、八月になつて、やつと醸出者名簿が送られてきた。開いてみると、みな教え子ばかりで、一五〇人の名が記されていた。一人一人涙をおしぬぐいながら名簿を見つづけていたところ、その中の一人に、豊子という婦人の名前がある。その御主人はよく知っていた人であるが、さきごろ交通事故で世を去られた方である。その人の末亡人で、遺児を抱えて苦

労していると聞いていた。そのような方まで募金に応じてくださると知つては、もはやわたくしには堪えられることではない。このようにならねばならないのならば、研究は止めにする。「どうぞ」のようになつて下さ財の募集はしないようにして下さい」と、恒藤先生（大阪商大学長）にお願いしたことであつた。（中略）

このように淨財の寄進によつて、昭和三十二年八月十二日から十月三十日までに実施した、第七次発掘には、じつに予想外の大きな成果があつた。近世大阪の発祥と目すべき石山本願寺の発見である。 一四〇

昭和三十二年八月十二日から十月三十日までに実施した、第七次発掘には、じつに予想外の大きな成果があがつた。近世大阪の発祥と目すべき石山本願寺の発見である。』一四〇

（一四三頁）これを読み、古田先生が「邪馬台國」徹底論争シンポジウムや和田家

文書保管(注②)のための金策に苦労されていたことを思いだしたものである。

## 二、喜田貞吉『帝都』の異論

山根氏は発掘費用不足の他に、学問的に有力な批判にも苦しんでいた。それは難波宮を大阪市北区の長柄豊崎にあつたとする、現存（遺存）地名を根拠とする古くからある説であつた。『難波の宮』にそのことが紹介されている。

”しかしそれには有力な異論が提出されていた。喜田博士の名著『帝都

孝徳天皇大化の新宮は、実に此難波宮にて行はれた。精しくは難波長柄豊崎ノ宮と申す。今之豊崎村大字南北長柄は、実に其の名を伝へて居るものであろう。此所に始めて支那の長安城に模した新式の都城が經營された。』  
五八頁

るものであつた。此所に始めて支那の長安城に模した新式の都城が經營された。』

喜田博士の説にしてもそれを支持しようとして唱えられた天坊翁の説にしても、どれも人を納得させることはむずかしい。この種の考え方には、享保十九年に完成した「五畿内志」の所説にもとづいて考案されたもので、天満の北方に長柄の村名のあることに注意をひきおこし、一方、

上町台地を都城建設地として狭隘と  
感じて説を構えられたことであつた。

重卷上

“重圈文系軒瓦にもとづく様式論”を最初に考えついた時代には、難波

を最初に考えついた時代には、難波の宮址の所在位置について、学者の

あゝぞこ定説までつて、ハなかつたの

### 三、置塙章氏が発見した一枚の瓦

喜田氏の『帝都』には、難波長柄  
豊崎ノ宮と申す。今豊崎村大字南  
北長柄は、実に其の名を伝へて居る  
もの」とあり、当時の学界では最有力  
説だつたようだ。私財や寄附金を投  
入して法円坂の発掘を続ける山根氏  
に対し、「長柄は明瞭に天満の北で、  
長柄村の名は古い。人柱で名高いナ  
ガラを法円坂町にもつていくなどは  
ムチャヤだ」という批判も寄せられて  
いた。

この批判は文献史学の視点によれば、『日本書紀』孝徳紀に見える孝徳天皇の宮殿名「難波長柄豊崎宮」を史料根拠として、それが現存地名の「長

書かれた歴史が何だ、そんなものは昔から権力者がどのようにも書きかえができる。しかしこの瓦は、法円坂町の大地の数尺下層から出土してきた状態をこの眼でたしかに認めたのだ。これほど確かなものがあるか、いまの大坂は昔の難波、その難波の土地の地下から、この古瓦は出てきたのだ、これほど確かなものがあるか、いまさら商売替えも出来ないから、このまま七十の年までは建築家でとおし、そのあと考古学を勉強して、きっとこの瓦にものをいわせてみせる』一八〇一九頁

柄」「豊崎」(大阪市北区)と対応し、そ  
の地の方が狭隘な上町台地よりも広  
く、王都王宮の地にふさわしいとす  
る、極めて常識的で合理的な判断に  
より論証が成立している。これには  
論理的な反論が困難なため、山根氏  
は発掘調査により法円坂から大型宮  
殿跡を検出するという実証的な考古  
学的成果で反論に替えた。

戦後、続けられた山根氏の執念の発掘により、法円坂からの鷗尾出土を皮切りに、ついに大型宮殿跡（聖武天皇の大極殿跡など）、その下層からは別の宮殿跡（後に孝徳天皇の長柄豊崎宮とされる前期難波宮）が出土し、難波宮が上町台地法円坂に存在していたとする定説が成立した。この圧倒的な考古学的実証により、文

から大型宮殿跡が姿を現し始めて、難波長柄豊崎宮を北区の長柄豊崎にあつたとする説が有力だつたのであ

若き日に見た上町台地出土の一枚の古瓦（重圈文丸瓦、蓮華文丸瓦）に支えられていた。この瓦は置塙章（おじおあきら）氏（陸軍技師）が発見したもので、その置塙氏の執念とも言える言葉が『難波の宮』冒頭に記されてゐる。

献史学の論証による長柄豊崎説は影を潜めていく。しかし、「真の問題」はここから始まる。

#### 四、難波長柄豊崎宮、北区長柄説

難波長柄豊崎宮を大阪市北区の長柄豊崎とする喜田氏の見解は、『日本書紀』の史料事実と現存地名との対応に基づいており、大阪の他の場所に同様の地名が見当たらないことから、山根氏による難波宮跡発見までは最有力説であった。

喜田氏には、この他にも法隆寺再建論争や藤原宮長谷田土壇説など、『日本書紀』や諸史料に見える記事を根拠とした仮説提唱と論争があつたことは著名だ（注③）。例えば、天智紀に法隆寺が全焼したと記されており、燃えてもいらない法隆寺が火災で失われたなどと『日本書紀』に書く必要はないという文献史学の骨太な論証方法で、法隆寺再建説を喜田氏は唱えた。対して、仏教建築史学や仏像研究による実証的で強力な非再建説があつたが、火災の痕跡を持つ若草伽藍の出土により、喜田氏の再建説が定説となつた。

しかし、それではなぜ現在の法隆

寺が推古朝にふさわしい建築様式であり、仏像も飛鳥仏なのかなという疑問は未解決のままであつた。しかも

その後に五重塔の心柱伐採年が五九年であることが年輪年代測定により判明し、再建説では説明が困難となつた。後に米田良三氏により法隆寺移築説が発表され、この問題はようやく解決を見るに至つた（注④）。

同様の問題が難波宮所在地論争にも横たわっている。孝徳紀に見える孝徳天皇の宮殿名「難波長柄豊崎宮」を史料根拠として、それが現存地名の「長柄」「豊崎」（大阪市北区）と対応し、その地の方が狭隘な上町台地よりも広く、王都王宮の地に相応しいという、常識的で合理的な長柄豊崎説だつたが、山根氏の発掘調査により、難波宮が上町台地法円坂（大阪市中央区）に存在していたことが明らかとなつた。しかし、それではなぜ『日本書紀』に記された「長柄豊崎宮」という名称が法円坂ではなく、他の場所（北区）に遺存するのかという問題が取り残されたままだ。すなわち、解決すべき「真の問題」とはこのことである。

#### 五、前期難波宮は長柄豊崎宮か

喜田氏の見解は『日本書紀』の史料事実と現存地名との対応という文献史学の論証に基づいており、他方、山根氏の上町台地法円坂説は考古学的出土事実により実証されている。な

ぜ、このように論証と実証の結果が異なつたのか。ここに、近畿天皇家一元史觀では解き難い問題の本質と矛盾があるのだが、その理由は明白だ。

「列島内最大規模の宮殿であるからには、列島の最高権力者である近畿天皇家の宮殿のはず」という、一元史觀の歴史認識（岩盤規制）に従わざるを得ないからだ。

結論から言えば、山根氏が発見した前期難波宮は孝徳紀に書かれた「難波長柄豊崎宮」ではなく、九州王朝の王宮（難波宮）だった。その証拠の一つとして、法円坂から出土した聖武天皇の宮殿とされた後期難波宮は、『続日本紀』では一貫して「難波宮」と表記されており、「難波長柄豊崎宮」とはされていない。この史料事実は、法円坂の地は「難波長柄豊崎」という地名ではなかつたことを示唆する（注⑤）。

この結論が妥当であれば、孝徳天皇の「難波長柄豊崎宮」は、九州王朝の難波宮（前期難波宮）で執行された賀正礼に参加し、その日の内に帰還できる近傍にあつたはずだ（注⑥）。その「難波長柄豊崎宮」の最有力候補地こそ、大阪市北区の豊崎・長柄エリアではあるまい。そうであれば、喜田氏が論証した長柄説と山根氏が実証した法円坂説は相並び立つことができる。残された「真の問題」、孝徳天皇の「難波宮発掘調査六〇周年記念特別展 大阪遺産難波宮—遺跡を読み解くキーワード—」大阪歴史博物館二〇一四年。

#### （注）

- ①「難波宮発掘調査六〇周年記念特別展 大阪遺産難波宮—遺跡を読み解くキーワード—」大阪歴史博物館二〇一四年。
- ②信州白樺湖畔の昭和薬科大学諏訪校舎で開催された「古代史討論シンポジウム『邪馬台国』徹底論争—邪馬壹国問題を起点として—」（一九九一年八月一日～六日、東方史学会主催）のこと。
- ③古賀達也「洛中洛外日記」三〇九七～三一〇六話（2023/08/22～09/07）
- ④現法隆寺は飛鳥時代の古い寺院が移築されたものとする説を古田学派の研究者、米田良三氏が発表している。
- ⑤古賀達也「洛中洛外日記」一四一八

話(2017/06/09) “前期難波宮は「難波宮」と呼ばれていた”

同「洛中洛外日記」一四二一話

(2017/06/13) “前期難波宮の難波宮

説と味経宮説”

同「白雉改元の宮殿」「賀正礼」の

史料批判」『古田史学会報』一一六

号、一〇一一年。『古代に眞実を求めて』(一七集、一〇一四年)に再録。

⑥『日本書紀』白雉元年(六五〇)と三年(六五二)の正月条に次の記事が見えて

「白雉元年の春正月の辛丑の朔に、車駕、味経宮に幸して、賀正礼を觀る。(中略)是の日に、車駕宮に還りたまふ。」

「二年春正月の己未の朔に、元日

礼おわりて、車駕、大郡宮に幸す。」

【荻上紘一大学セミナーハウス理事長兼当セミナー実行委員長挨拶】

古代史学においては「史実」の解明が基本であり、そのためには史実を論理的、客観的、科学的に「証明」する必要があります。当然のことながら evidence-based になればなりません。

「史実」には、「When」「Where」「Who」「What」「Why」「How」などの要素が含まれますが、最初の4つは客観的情報です。

が「史実」に先行する議論が行なわれていますが、決して歴史観が先行されなければなりません。屡々「歴史観」の姿勢を貫きたいと考えています。

時は、7世紀の東アジアについて私以上に理解している人はだれもいないと思っていました。白村江の戦いについて言えば、唐が高句麗を滅ぼす過程で起つた戦いであるという視点で考えることが大切と語った鬼頭清明先生(1939年生まれ、2001年没)は65歳くらいでなくなりましたが、この人ほど東大学派からみ出た人はいませんでした。

【七世紀の東アジア情勢】

当時(7世紀)の東アジア情勢を考える時の問題の所在は以下の通りです。

- 1 唐の高句麗遠征
- 2 新羅の朝鮮統一
- 3 白村江の敗戦

百済は高句麗と同盟を結んでいる間に新羅を併呑したかった。

新羅は女王が続き兵力的にも百済を排することができなかつた。

唐は、高句麗→新羅→百済の順に征服して朝鮮半島を制圧しようと考えていました。

## 古田武彦記念古代史セミナー 2024報告

日野市 橋高修(文責)

「古田武彦記念古代史セミナー」

024」は11月9日(土)、10日

(日)の2日間にわたりて大学セミ

ナーhaus(八王子市)講堂で行われた。以下、文責者の判断による抄録(です・ます調)と要略(である調)。

### 〈歴史観〉

私は筑波大学出身の65歳です。もう年なので家内から髪を染めるようになりますが、今日の参加者は高齢の方が多いので染めてこなくてよかったです。

【中村修也氏「唐の羈縻政策と白村江の戦い後の日本】

〈自己紹介〉

私は筑波大学出身の65歳です。もう年なので家内から髪を染めるようになりますが、今日の参加者は高齢の方が多いので染めてこなくてよかったです。

7 郭務悰の働き

8 新羅の対唐戦の勝利が日本への占領政策を阻んだ。

中国王朝が漢民族というのではなく隋以降は北方民族です。隋は常に高句麗と戦時状況にあり、唐も同じく高句麗に遠征したが倒すことはできませんでした。

高句麗は唐との戦闘を有利に運ぶために百済と同盟を結んで南方の安(新羅の)戦力をそがずに保持する

5 朝鮮式山城の作成者は誰か

6 就利山の会盟の意味

7 郭務悰の働き

8 新羅の対唐戦の勝利が日本への占領政策を阻んだ。

4 唐の羈縻政策に関する日本史研究者との無視

42年高句麗に使者として訪問(対百済戦のため高句麗を味方に付けようとした)、647年日本を訪問(百済攻撃に対し理解を求めた。孝德朝は親百済路線から親唐路線に方針を変えていた)、648年唐に行き百済出兵を依頼するというものでした。金春秋は唐の軍事力によつて百済を排除し半島南部に勢力を伸張し唐との同盟国というポジションを確保して高句麗戦に臨み、高句麗滅亡後に唐の矛先が新羅に向いた時にも

ことができるようになります」とが金春秋の目論見だつたのです。

### 白村江の戦い

そのような情勢の中で白村江の戦いは行われました。朝鮮半島の西海岸は海底が泥状になつていて船行がむずかしい、齊明朝は軍制を布いていないので派遣したのは一般人だった、そのような状況で齊明軍は白村江に到着するとすぐに唐軍に攻撃されほぼ全滅させられました。

### 唐の羈縻支配と近江朝廷

倭国では日本書紀に「筑紫都督府」と記されているように、唐による羈縻支配が行われました。日本書紀は羈縻支配の残像を消し去ろうとしたのですが、現在残っている写本は室町時代作成のものなので「筑紫都督府」は消し忘れたものと思われます。

近江朝廷について、飛鳥に唐軍が駐留していたため天智はやむを得ずに交通の便が悪い大津宮を造つたものと思われます。天智朝の組閣が天智十年正月十三日条に記されていますが、百濟人が多く高官に任命されています。唐軍の命令によるものでしょ。

在り方に対し、古田武彦氏の「学問の方法」を今一度想起するために、次の4点の課題を挙げた。

### 古田説に立つだけでいいか

「古田説」の検証という視点

### 外部に向けた発信力

わかりやすく説くこと

最後に大墨氏は『邪馬台国』はなかつた序章に記された「わたしの方法」を読みなおして今後の研究活動の指針にすることを参加者に呼び掛けた。

### 谷川清隆氏基調講演『日本書紀』卷分類の深化——倭国から日本国へ

天文学者の谷川清隆氏は、『日本書紀』の中の天文観測記事に注目し、天文観測記事が記載されている卷とされていない卷があることに気づき分類を始めた。谷川氏は『日本書紀』を「天群」「地群」「泰群」に分類した。その結果は、森博達氏が1999年に『日本書紀の謎を解く』で著わしたものとあるという。

【新庄宗昭氏「唐進駐軍の羈縻支配はいつまで続いたか——問題提起として」】  
新庄氏は著書『実在した倭京』(ミネルヴァ書房、2021年)で、発掘された藤原京の先行条坊について、壬申の乱で勝利した大海人皇子がまづ詣でたのは大海人皇子よりも上位者の所在地である「倭京」だつたことを主張した。新庄氏は今回の当セミナーの特別講師である中村修也氏の「白村江の戦い後に唐の進駐軍が大和まで来て羈縻支配を行つた」という主張に共感し、大海人皇子が詣でた上位者は羈縻支配を行う唐の進駐軍だつたという結論を得た。壬申の乱の反乱の主体は唐の羈縻支配に反対する大友皇子であり、乱を制圧した後の天武朝は羈縻支配の中だつたとの新説を披露した。今回は白村江の敗戦から羈縻支配の終了までを論じている。

【日本旧小国併倭地】は、首都が「筑紫」から「難波」の地へ移動したとみられる。形式上倭国は消滅か。白雉四年孝徳天皇の「天皇、恨欲捨於國位」は皇太子によるクーデター、これをきっかけに日本国を自称する新羅を攻撃している。

【日本旧小国併倭地】は、首都が「筑紫」から「難波」の地へ移動したとみられる。形式上倭国は消滅か。白雉四年孝徳天皇の「天皇、恨欲捨於國位」は皇太子によるクーデター、これをきっかけに日本国を自称する新羅を攻撃している。

壬申の乱は唐の援助による倭国王権再興の戦い。「薩夜馬」と「大海人の類似が強く疑われる。

### 大墨伸明氏「天智紀の郭務悰外交の舞台筑紫とその意味するもの」

大墨氏は、史料事実を積み上げていくと諸史料の記述はつながつていい、と前置きして発表を始めた。

【大墨伸明氏「古田武彦記念古代史セミナー2024」がめざすもの】  
大墨伸明氏は今後の当セミナーの

今回は推古朝以降に数回制定された「冠位」が上記の分類と適合しているとの論証を試みた。

### 新庄宗昭氏「唐進駐軍の羈縻支配はいつまで続いたか——問題提起として」】

新庄氏は著書『実在した倭京』(ミネルヴァ書房、2021年)で、発掘された藤原京の先行条坊について、壬申の乱で勝利した大海人皇子がまづ詣でたのは大海人皇子よりも上位者の所在地である「倭京」だつたことを主張した。新庄氏は今回の当セミナーの特別講師である中村修也氏の「白村江の戦い後に唐の進駐軍が大和まで来て羈縻支配を行つた」という主張に共感し、大海人皇子が詣でた上位者は羈縻支配を行う唐の進駐軍だつたという結論を得た。壬申の乱の反乱の主体は唐の羈縻支配に反対する大友皇子であり、乱を制圧した後の天武朝は羈縻支配の中だつたとの新説を披露した。今回は白村江の敗戦から羈縻支配の終了までを論じている。

【日本旧小国併倭地】は、首都が「筑紫」から「難波」の地へ移動したとみられる。形式上倭国は消滅か。白雉四年孝徳天皇の「天皇、恨欲捨於國位」は皇太子によるクーデター、これをきっかけに日本国を自称する新羅を攻撃している。

壬申の乱は唐の援助による倭国王権再興の戦い。「薩夜馬」と「大海人の類似が強く疑われる。

【日本旧小国併倭地】は、首都が「筑紫」から「難波」の地へ移動したとみられる。形式上倭国は消滅か。白雉四年孝徳天皇の「天皇、恨欲捨於國位」は皇太子によるクーデター、これをきっかけに日本国を自称する新羅を攻撃している。

壬申の乱は唐の援助による倭国王権再興の戦い。「薩夜馬」と「大海人の類似が強く疑われる。

【日本旧小国併倭地】は、首都が「筑紫」から「難波」の地へ移動したとみられる。形式上倭国は消滅か。白雉四年孝徳天皇の「天皇、恨欲捨於國位」は皇太子によるクーデター、これをきっかけに日本国を自称する新羅を攻撃している。

【阿部周一氏「7世紀から8世紀の列島における倭国から日本国への転換の詳細】  
阿部周一氏が倭から「日出處」——日本の遣隋使が倭から「日出處」——日本の有無、「隋・唐への遣使の有無」について分類を行い、上記の分類と一致していることを確認している。

白雉五年の遣唐使段階で倭国から日本国への国体の変更が行われた。大化元年七月条「明神御宇日本天皇、大化二年一月「明神御宇日本倭根子天皇」、この頃、日本号が初めて使われている。

日本号が初めて使われた。白雉五年の遣唐使段階で倭国から日本国への国体の変更が行われた。大化元年七月条「明神御宇日本天皇、大化二年一月「明神御宇日本倭根子天皇」、この頃、日本号が初めて使わ





【旧唐書】日本国伝の論点

（倭国と日本国は別国か）

『旧唐書』日本国伝には、

「日本國者倭國之別種也」  
と明記されており、倭国＝日本国と  
される通念とは正反対の表現となっ  
ている。これをどう整理するか、がま  
ず論点となる。

（国号変更の問題）

次に、国号変更の問題である。

「以其国在日故以日本為名」  
「倭国自惡其名不雅改為日本」

とあり、国が太陽（が昇るところ）の  
辺りにあるから日本を国名にした、  
という説と、倭国の人人がその名前が  
雅でないことを嫌って日本とした、  
という二つの説を併記している。ど  
ちらも遣唐使の発言による。

（政権交代の問題）

もう一つは、倭国から日本国への  
政権の移行の問題。

もともと小国だった日本が倭国を併  
合したと記す。これも使者の証言。  
（唐は使者の発言を信用しなかつた）

（日本旧小国併倭国之地）  
「日本入朝者多自矜大不以實對故中  
國疑焉」

とあり、唐側は日本国（の遣唐使）の發  
言をこの段階では信用していない。

中国側が信用したかどうかはとも  
かく、日本国を称する国から遣唐使  
が訪れて日本と改名したいきさつを  
述べたことが記されている。

（論点の整理）

『旧唐書』日本国伝の冒頭の文章  
の中に三つの論点が記されている。

・倭国と日本国は別の国として存在  
したかどうか。

・日本国が太陽（が昇るところ）の辺  
りにあるので日本を自称したのか、  
倭国が倭国という名前を嫌つて日本  
に改称したのか。

・日本国が倭国を併合したという事  
実があつたかどうか。

この記事がいつ頃のことかは記さ  
れていないが、七世紀後半のことと  
考へて大過ないだろう。

（禰軍墓誌の発見）

七世紀後半に「日本国」の名称が唐  
王朝内で通用していたかどうかを考  
える時に禰軍墓誌は避けては通れな  
い金石文である。

『日本書紀』に登場する禰軍（613  
年生 - 678年2月19日没）は百濟生  
まれの唐の官僚。唐・新羅軍が百濟を  
滅ぼした戦いで唐に捕えられ、その  
後唐の官僚となり百濟遺民の反乱を  
撫慰するため旧百濟の熊津都督府  
に派遣された。唐の官僚として67

年に死没している。

天智紀三年九月二十三日条の注に

「右戎衛郎將上柱國百濟禰軍」とし  
て「朝散大夫柱國郭務悰」らと共に來

朝したことが記載されている。

2011年に中国の西安市の個人  
コレクションの中から墓誌の拓本が  
発見された。「大唐故右威衛將軍上柱  
國祿公墓誌銘井序」という18文字

をはじめとする合計884文字の銘  
文である。その中に、

「於時日本飴礁扶桑以遁諒風谷遺  
虹負盤桃市阻固（660年、唐軍が百  
濟を平定した時に、「日本」の餘喚は  
扶桑に抛りて以て註を通れ、風谷の  
遺虹は盤桃を負いて阻固す）」

とある。中国国内の現存史料におい  
て「日本」が記された史料の初出。

墓誌のこの部分は難解である。前  
後の文脈や漢文の構成などを正確に  
把握しないと「日本」が何を意味して  
いるかは判断できない。ここでは文  
章に対する理解が浅いことを前提に  
して見通しを述べてみようと思う。

（東方の場所を意味する「日本」）  
禰軍墓誌は発見当初から、7世紀  
後半（墓誌作成は儀鳳三年（678）  
に「日本」が国名として唐内で通用し  
ていた確かな根拠になると主張され  
た。しかし墓誌の文章を精査すると、  
とは墓誌の「日本」解釈において無視  
することはできない。

ことと理解する説（鈴木靖民氏等）、  
唐の東方の場所を表しているとする  
説（東野治之氏等）、あるいは墓誌の  
当該箇所を「於時日、本余曉」と区切  
り方を変えて解釈する説（石田泉城  
氏等）など、諸説が主張され、墓誌に  
記された「日本」が、日本国を意味し  
ているのか、日が上がる場所＝唐の  
東方にある場所を意味しているのか、  
意見がわかっている。

（日本国号は、七世紀の唐では通用し  
ていなかつた）

ここで重要なことは、墓誌に記さ  
れた「日本」が日本国以外を意味して  
いるとするならば、日本国という國  
名は当時の唐では認識されていなか  
つたということ。日本国という國名  
が存在しているにもかかわらず、墓  
誌に異なる意味で「日本」を使用する  
ことはありえないからである。被葬  
者は禰軍は唐の高級官僚として没し、  
埋葬されたのだからなおさらである。  
本が日本国を指しているのだとす  
ると、旧唐書も三國史記も白江の戦  
いで「倭」軍と戦つたと記述されてい  
ることと整合性がとれないものである。  
百濟滅亡の時点で、旧唐書に「日本」  
ではなく「倭国」が使用されている  
ことは墓誌の「日本」解釈において無視  
することはできない。

# 「東日流の旅」に参加して

仙台市  
広幡  
文

東京古田会主催十一月二十七日（  
二十九日の「東日流の旅」に参加させ  
ていただきました。以前東京古田会  
の「記紀歌謡研究会」（二〇一七〇一  
九）に参加し、そこで知り合った方の  
案内で参加できました。

日 縄文から中世・現代に至るまで(初)

初日の二十七日は、青森空港で待

だと、玉川さんは強調されました。  
次は中世の物語を象徴する鰯ヶ沢町の天皇山と高倉神社。「壇ノ浦で入水した安徳天皇と宝剣を救つた(掬つた)安東水軍が、宝剣を東日流浮太刀に祀つたと和田家文書に記されるが、現在地名鰯ヶ沢町北浮田の高倉神社がこれに当たる」と玉川さんが解説。

高倉神社の境内は銀杏の落ち葉で黄色に染まり、滑りやすそうになつていました。神社の銅鑼を鳴らす綱に小さなたくさんの鈴がついていて銅鑼そのものよりさわやかな響きを伝えてくれました。

次は中世の物語を象徴する鰯ヶ沢町の天皇山と高倉神社。「壇ノ浦で入水した安徳天皇と宝剣を救つた(掬つた)安東水軍が、宝剣を東日流浮太刀に祀つたと和田家文書に記されるが、現在地名鰯ヶ沢町北浮田の高倉

私が一番心に残つたのは日露戦争の毛髪刺繡。日露戦争準備のための八甲田山演習で多くの命を失いましたが、それを映画化し高倉健が主演した「八甲田、死の彷徨」を思い出しました。

そして宿に向かいました。進路の右側が日本海。鉛色の空と白い荒波が冬の津軽のものすごさを語つてくれます。映画「砂の器」でも、この深浦海岸の冬の光景が使われていたことを思い出しました。

## 古十三湖を一周(二日目)

この日は山登りから始まりました  
深浦・追良瀬川沿いの見入山観音の

A vertical photograph of a tree with yellow autumn leaves, showing a close-up of the foliage against a clear blue sky.

初日の最後は明治の様子を伝える深浦の円覚寺。深浦には安倍比羅夫が戦ったという謂われの地があり、また北前船の集まる大きな港町としても栄えた様子を円覚寺がたくさんの絵で紹介しています。船の安全祈願をする持衰の姿を絵にしているのは、日本でもここだけのこと。

高倉神社の境内は銀杏の落ち葉で  
黄色に染まり、滑りやすそうになつ  
ていました。神社の銅鑼を鳴らす綱  
に小さなたくさんの鈴がついていて  
銅鑼そのものよりさわやかな響きを  
伝えてくれました。

この日は黄金崎・不老不死温泉に

この日は黄金崎・不老不死温泉に一泊。温泉の色が深い赤色でびっくり。でもとてもあたたまるお湯でした。お料理も抜群。この日の夕食でも玉川さんが和田家文書のこといろいろ解説してくれたので、ついつい私はずっと持ち続けていたり。どうしてそれ以上の古い時代のこと

この日は山登りから始まりました  
深浦・追良瀬川沿いの見入山観音の

この日は山登りから始まりました  
深浦・追良瀬川沿いの見入山観音の



## 金ヶ沢 まいちょう

からダメだが、和田家文書では百歳以上の天皇は一人も存在しない。その間は空位という扱いをしている」と回答。そう言われて私はひらめきました。「日本書紀や和田家文書を書

見学です。山形の山寺よりもきつく  
て狭い登山道ですが、登りきつた先  
に馬頭観音と千手観音を祀るほこら  
がありました。言い伝えでは平安時  
代からのもので、南北朝の時再建さ

れだと紹介されています。でも和田家文書に関係する場所ではなく、玉川さんが現役時代に自分で設計した橋を見せたくて、この観音堂に連れてきたのではと思つてしましました。ただ、山の入り口でたくさんのが実を拾い、平地でぶなの実を拾つたことのない私は、青森がいかに寒い地かと実感させられました。なお見入山観音から白神山地はすぐのこと。



JR 木造駅

目を開けている時と閉じている時の両方の顔を描いたもの」と解説。また補足して「漆塗土器の出土もあり、八戸是川遺跡から青森三内丸山遺跡を経て亀ヶ岡に漆器が伝わったと考えられる。八戸是川からは二戸にも移り、現在の漆産業へと伝わっている。」  
「亀ヶ岡はもともとカムイケ丘」。縄文時代、壮大な文化交流があったようです。

資料館の周りは大溜池で、これも十三湖の名残と説明受けました。

はもつと北側にあります。昔の河口は今河口付近から南に向い、何キロか南下したあと海に流れ注ぎます。昔の河口の絵図が震災前の仙台市の蒲生干潟にそつくりだったの、この古地図は信頼できると自分で太鼓判を押しました。

次は有潤(うま)の浜。戦いが済んだあと、安倍比羅夫と宴会をした場所だそうで、その話を聞いて、戦いはなかつたと勝手に思い込みました。阿弓流為も鬪いはせず仲良く付き合い、都を見せようと言われて都に連れられていき、そこで首をはねられたのが真実。権力者側の記録は信じてはいけません。

午後四時近く、曇り空であたりはうす暗くなりかけましたが、本日最後の見学地安倍神社を参拝。玉川さんの説明で、長髓彦の骨を最終的に葬った場所とのこと。中腹のほこらで女性二人が石に彫った漢字を熱心に読んでいました。「奉斎月夜見命」とありました。

月夜見命と長髓彦と一緒に祀るとはすごい。これは本物だ。そう興奮して、手のひらが熱くなりました。理由を説明するのに三ページ分くらい必要なので、後の機会に説明したいと思ひます。

もう一つ、この場が十四世紀の安

午後は亀ヶ岡遺跡を紹介する木造水軍が造ったという洞穴城がありま

す。バスの中、中山仁出演のビデオ映像を見せてもらいました。

午後は亀ヶ岡考古資料室の見学。有名な遮光器土偶が発見された亀ヶ岡遺跡。

玉川さんが「あれは遮光器ではなく、

東氏の本拠地福島城のすぐ近くにあるという事実にも興奮させられました。先祖の墓があるということは、墓守がいたということ、ずっと仲間が暮らしていた地域なのです。これも真実としか思えなくなりました。ます明日が楽しみ。そんな気分で五所川原の宿に向かいました。この日もおいしいお酒をいただき、和田家文書の議論に楽しく耳を傾けました。

### 卑弥呼ゆかりの地五畿形(三日目)

最終日は天候不順、晴れたり雨降ったり雪降ったりが繰り返され、冬間近の津軽の厳しさを知らされました。この日は沼に沈む砂沢遺跡が最初の見学地。ここは二千四百年前の水田跡地が発掘された場所。田舎館より三百年早い水稻耕作地です。日本でこれに並ぶ古い水稻耕作地は福岡県の板付遺跡。さらに古いのが菜畑遺跡。だから青森は日本で二番目に水稻耕作が始まった地。玉川さんの解説では「和田家文書では、中国の黄河から青森に直接伝わってきた」とのこと。

次は巨石の男神・女神で有名な山風森へ。ここはまさに藪こぎの道。藪こぎは岩魚捕りで毎年地元仙台で経

驗していますが、旅行先での体験は初めて。でも何度も来られている方々が案内人なので、安心してついでいきました。

そしてこの日の中心テーマ、九州から卑弥呼が黄憧（やまい）によつてさまでいつづけ）て東日流にやつてきた土地、五角形の地（五畿形の見学。ここは五畿形を発見された竹田侑子さんの案内。まず和田家文書にある「卑弥呼の降神大法」に記される「三角二つ」の底辺をなす（同緯度に位置する）二つの愛宕神社を見学。最初の宮本愛宕神社にはハルニレの大木があり、やっぱり青森は寒いと実感させられました。二つ目の日新愛宕神社も宮本と同じ地蔵堂で、ご神体が靈石。

そして三角形のてつぺんをなす「沢田森」へ。沢田森は和田家文書では「板之木邑の沢田盛」と記され、字の通り、森ではなく小さな古墳。和田家文書では沢田盛は「アラハバキ王安日彦王の墳墓で、遺骨は仁徳時代長髓彦王の遺骨とともに市浦邑に移葬された」と記されているそうです。

要するに、三か所のアラハバキ信仰地を三角形で結び、もう一つの三角形を対称（シンメトリー）に引くと現在の五畿形地名の場所に「五角形」ができるというのが竹田侑子さんの



高通遺跡 弥生時代の水田跡

説でした。雨や雪に降られながらも、紀元前・紀元後の世界をさまようのはとても貴重な体験でした。歩く道の片側を流れる小川にたくさんリソゴの実が浮いていて、どれもおいしそうだつたのに拾うことができずとても残念。

この日の見学の最後は、田舎館村埋蔵文化財センターで、垂柳遺跡（二千年前の水田跡地）を見学しました。この水田跡地は昭和六十年頃見学に来ていて、センター職員の解説には興味が持てなかつたので、壁に貼られた展示品（写真や解説図など）をじっくり見学しました。

その中で二つの展示に目がいきました。まず東アジアの水稻耕作地帯の地図。揚子江下流の河姆渡遺跡が

七千年前、黄河流域は四千年から三千五百年前。そして韓半島が二千八百年前後で、菜畠遺跡とほぼ似た時代。だから矢印が「河姆渡→黄河→韓半島→菜畠遺跡→板付遺跡」と記されていますが、青森の砂沢遺跡や垂柳遺跡には矢印がありません。黄河から直接青森へ渡つたと記録する和田家文書、河姆渡の温暖系の水稻ではなく、黄河の寒冷地仕様の水稻が渡つてきたと考へると、青森で早期の水稻跡地が発見されるのは自然なことと理解でき、またまた和田家文書の正しさが証明されたような気分になりました。ただ玉川さんは「江戸時代に砂沢や垂柳地区で古い時代に農耕文化があつたことを示す農機具などが見つかつていて、こういいう予測めいた文書が書けたのでは」と解説してくれました。

もう一つ見てよかつたのが、砂沢遺跡の発掘直後の写真。今朝雨にけぶる沼を見ただけだったので、写真で地上に現れた砂沢遺跡を見ることができ、とても幸運でした。

青森の皆さんとはこの垂柳遺跡で要するに、三か所のアラハバキ信仰地を三角形で結び、もう一つの三角形を対称（シンメトリー）に引くと現在の五畿形地名の場所に「五角形」ができるというのが竹田侑子さんの

花の女子旅雪中行軍（四人旅）  
寄居町 山田まゆみ

まずは空港からバスで青森駅へ。青い森鉄道、乙供（おつとも）駅まで一時間。下車後、可愛い女子高生に道を聞き、真暗闇の中、東北温泉に無事到着。黒い温泉で温まつた。

### 日本中央の碑（つぼのいしぶみ）

翌朝は雪、それも本降り。でも予定通り、タクシーでまず石碑の発見場所へ。呆れ顔の運転手さんを尻目に落葉に雪の降り積もる階段をそつと下る。少し平場になつた所に発見時の説明板。更に階段を下つた先の赤川近くの湿地が発見場所。標が建つていて危険なので上から見る。雪の降りしきる中、とても納得のできる場所であつた。車で少し走り、真新しい保存館へ。五センチ程雪の積もつた駐車場から新雪を踏み中へ。何とあつらかんと「日本中央」の四文字のみの石碑がケースの中に鎮座。伝説では坂上田村麻呂が彫つたとい

を計画してくれることと、また参加させてもらいたいと思つています。

うが、田村麻呂は現在の水沢付近までしか来なかつた。本来の建立者であろう、日本將軍である安倍の名も年月日も全て削られていた。平安時代から多くの歌に詠まってきたといふが、ガラスケーズの中からは何も感じ取れなかつた。

### 千曳（ちびき）神社

（祭神） 賽の神・八衢彦神・八衢姫神

保存館からほど近く、集落から少しはずれた林の中に千曳神社はあつた。鬼と碑を関連づけた伝説があるが、保存館でもらつた資料の中に次のようなことが書いてあつた。

「つぼのいしぶみ」が古くから歌に詠まれたり、多くの研究者によつてその所在が探索されたが、何故この地域が特定されたかというのには、いろんな記述や古地図、または前述の伝説のこともあるが、地名によることもその要因の一つと考えられる。まずは「坪」（つぼ）と「石文」（いしぶみ）という地名が隣接してあることである。（発見された石は、この石文から出土している。）また、鴨長明の「発心集」に「壺の碑（いしぶみ）」を一地名として捉えていた記述があり、千曳神社周辺がその地域と考えられてゐた。明治九年、明治天皇が東

北巡行の際、その命を受けて石碑を探索させ、社殿の下を発掘させたという記録が残つてゐる。』

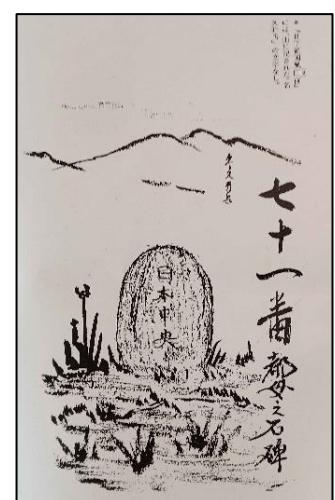
### 是川縄文館

白木の鳥居の先に、青森ヒバの美しい長い参道が見渡せる。足元を気にしながら奥へと進むと、左に直角に曲がつた先にお社があつた。少し朽ちている。（境内の二つの小社も床が抜け落ち空つぽ）そつと戸を引くと、なんと三巴紋の幕。奉納絵馬にはいくつもの蛇神が描かれている。これは曲がり参道ではないか？（陰陽道の封靈四法の一つ）蛇神は祟り神として恐れられ、封じ込められたのでは。運転手さんも「蛇が祀られてゐるらしい」と話していたが、まさに絵馬が教えてくれた。常陸国風土記の夜刀の神のように、水田開発により追い払われたのでは？

千曳神社の「ち」はおろち（大蛇）、みずち（蛟）の「ち」ではないかと想像は膨らむ。調べてみると、県南最古の神社であり、往時は参詣者で賑わつたそうだ。運転手さんによると、「今はすっかり寂れ、集落の人も少なくなり、祭りもできなくなつてしまつた。せめてもと、節々の日に寄り集い飲食を共にする。」とのこと。

千曳駅は人里から離れて雪景色の中。運転手さん、ホームまでの下り坂

を案じ、傘をさしかけて送つてくれた。電車で千曳から八戸まで四十分。



（第七十一番 齋母之石碑）

### 和田家文書備忘録 10 弘前市相馬の長慶天皇陵 港区 安彦克己

私が『和田家文書』を読み始めた頃、五所川原市の五所は、弘前市の奥地相馬に在つた長慶天皇の御所が岩木川の大洪水により流され、流れ着いた場所にその名を憚つて五所川原と名付けられたと知り、驚いたことを覚えている。弘前の奥地に天皇の御所があつたのだろうか。いつか相馬に行つてみたいと温めていた。

平凡社『青森県地名辞典』では五所川原の地名は地域の文書『平山日記』

を引いて  
「寛文年間に岩木川が屈曲し、五  
カ所に川原があつたため村名となつ  
た」  
としている。この説明では「御門の御  
所」とは全く関連性が見いだせない。  
『東方年表』によれば、長慶天皇は、  
南朝第三代の天皇で後村上天皇の皇  
子、名は寛成（ゆたなり）、一三六八年  
から一三八四年まで帝位にあり、  
ネットを引くと墳墓の地は「未詳」と  
ある。

『東日流外三郡誌』（『和田家文書』）  
の史料を見てみよう。（抄録した）

史料1 「寛成帝之御所八幡流ル」（注  
1）

「応永二十一年十月七日 大雨ニヨ  
リ行来川大洪水ト成リヌ。鼻和郡ノ  
御所ヨリ寛成天皇ノ八幡宮奥院流サ  
ル。不可思議ナル哉、奥院壊レズ大原  
ノ東ニ流レテ留マル。以来此地ヲ御  
所河原ト称シタリ。亦下ノ御所トモ  
称サレ、此地ニ御所八幡宮ガ建立サ  
レタルモ、御所ト名称セルハ恐レ多  
シトシテ五所ト称セラルニ至ル。五  
所川原邑トハ是ニヨリテ称誕セリ。  
享保二年 飯詰組代官青沼」

ネットのブログには、江戸期に三  
度（明暦、寛文、貞享）の大洪水によ  
つて、「五所神社にあつた長慶天皇の  
ご神体と伝えられる祠が流された」



長慶天皇御陵墓

地」として整備されていた。  
東方に目をやると八甲田山の連峰が  
一望でき、主峰大岳には雪が映えて  
いた。

御所であることを伝える『和田家文  
書』を挙げる。

史料2 「寛成帝御成之事」（抄  
録）（注2）

「東日流相馬御所上座敷御陵コソ寛  
成帝之御在所ニシテ、応永十二年八  
月十五日、崩御日子ナリ。日本諸国ニ  
御陵伝説アルモ、東日流蝦夷管領藤  
崎城主安東教季殿ノ式目録ニ記筆ア  
リ」

続いて、「安東式目録」には「次ノ  
条能ク護ルベシ」として四条を挙げ  
ている。

「一に、御所近くで乗馬及び刃物は  
持つてはならぬ。一に、酒・米・野菜・  
木炭・毛皮・魚貝は毒審所へ届けよ。  
一に、御所柵辺に近寄るものは斬首  
の刑とする。一に、玉座近くに仕える  
者は二十四刻通夜警護すべき」

としている。

この史料の記録者は安東教季。行  
事を変えて、陸奥國司・南部守行が「是  
ノ如ク、長慶帝ノ東日流御臨幸ハ御  
事実也」と書き添えている。南部守行  
の添え書きがある『和田家文書』は珍  
しい。御所としての警護に配慮した  
式目が採集されていた。



上宮

### 史料3

陵墓の存在については、津軽為信  
の代に記された『石田家文書』の「起  
て前田利家・浅野弾正が下向するに  
あたり、長慶天皇の御墳墓が明らか  
になれば、藩主の落ち度になること  
から境内地の名前を変え齋主も変え  
るよう、元和二年（津軽藩）奉行所高  
坂伝兵衛・打越城右衛門が発した文  
書が残ると『相馬村史』（p203）  
にある。長慶天皇の御陵をひた隠し  
にしていた。

### 史料4

「秋田境上磯東日流境に長慶平ありて、加之地に丑寅之御所を二年に涉りて寛成の御門を御成せしむ跡ぞあり。是を長慶平とて今に遺りき」とある。この史料から、長慶天皇が丑寅東日流に入るに際し、日本海を深浦に上陸し、二年を経て吾妻川を上り相馬に到着したのであろう。相馬とその南に位置する大館市の山並みは県境であり、その稜線に長慶ノ森、長慶峠と御門の名を冠した深山の山が連なる。

以上からすると、五所川原の地名譚は御所川原であつたと、確信している。『地名辞典』は改めなくてはならない。

(注1) 『東日流外三郡誌』第一卷  
八幡書房 456 p  
(注2) 『東日流外三郡誌』第一卷  
八幡書房 451 p  
(注3) 『和田家資料』陸奥史審抄全  
ネット和田家資料

## 古代史コラムNo. 1 「大作家」 A Iと会話して

世田谷区 國枝 浩

A Iの回答：簡単に言うと、1、は物理的に墓が大きいことを表しており、「文脈から考えると、大きい墓を作れるが適切と考えられる」になる。2、も同様に墓が大きいということで正しい読みになる。

A Iのこの回答は卑弥呼の墓は大きくなければいけない、例えば、箸墓古墳のような前方後円墳のように。彦氏を「存知ですか?」と何回か問いかけると、要領よく氏の説をまと

私の質問：魏志倭人伝の卑弥呼の墓が作られた場面で、「大作家」と記述されているが、読み方は次の三通りが候補に挙がるだろう。

- 1、「大きな墓を作る」
- 2、「大きく墓を作る」
- 3、「大いに墓を作る」（大いに）は「一所懸命」という意味）

A Iの回答：簡単に言うと、1、は物理的に墓が大きいことを表しており、「文脈から考えると、大きい墓を作れるが適切と考えられる」になる。2、も同様に墓が大きいということで正しい読みになる。

私が3、を支持していた理由は「大」は「作」という動詞の前にある。「大いに（一所懸命）」ならばそれは副詞で、「作る」という動詞を修飾している、よって「作」の前に無ければならないと考えたからだ。「大」は「作」

めたり、ときには著作の紹介などが行われる。批判めいた答えはほとんど返つてこない。東京古田会について問い合わせると、過去の研究会の紹介や、古田会のホームページが出てきた。

そこで、「大作家」の読み方を尋ねてみた。以前から気になっていた問題だ。次のような仕方で。（ここに言う「家ちよう」は「塚」つまり「墓」のこと）

しかし、1、は文法的に無理がある。「大きい墓を作る」という読み方になるとには「作家」の順に並ばなければいけない。「大きい」が形容詞であれば「冢」という名詞を修飾することになり、「冢」の前になければならない。よって、1、は拙い解釈です。また「文脈から考えると」という回答は、卑弥呼の墓は「大きくなければいけない」という先入観を持つて読むという」とではないのか。卑弥呼の墓が「大きい」という文脈は「大」の字からもたらされたものでしかない。「大」の字の品詞や意味を解釈する段階で「大きい」という形容詞的な意味を無条件に持ち込むのはいかがなものか、と。

その後、2、と3、の優劣を論じ、3、が正しい読み方だという私の見解も伝えた。

A Iの第二回目の回答：「おっしゃる通りです。文字通りに解釈すれば、大きいに墓を作る。一所懸命に墓を作らば「作家大」の語順になる。よって2、は正しい読みではない。このようにA Iに伝えた。

A Iの第二回目の回答：「おっしゃる通りです。文字通りに解釈すれば、大きいに墓を作る。一所懸命に墓を作らば「作家大」の語順になる。よって2、は正しい読みではない。このようにA Iに伝えたからだ。」「大」は「作」

を次のようにぶつけてみた。

私の見解：頂いた回答は予想通りのものだつた。多くの解説書が「墓が大きい」という意味に理解しているからだ。

そこで、「大」は形容詞ではなく副詞である。そこで、私は3、が正しいという結論に達したのであつた。

実は2、の読み方は「」へ最近、ある本に出ていたもので、一瞬「そういう読み方もあるのか」と思つて考え込んだ。しかし、果たして「大きく」は副詞なのかは疑問だという考えに至つた。「英語に訳してみよう」。中国語は文法的には日本語より英語に近い（注）。

もつと A-I からの突っ込みも欲しかった。それと同時に A-I も柔軟な姿勢を持つていて理解に対する A-I が心配にならなかった。人間なら「首になる」かも知れない。

「それでいいのか」と A-I の立場が、いずれにしても、これからも A-I と「会話」していくと思う。A-I に、もっとと賢くなつてもらいたい、そこからさらに学ばせてもらおうという魂胆があることを告白しておこう。

ところで、卑弥呼の墓が大きいからかは、この「大作家」という一文だけからはわからぬ。大きいかもしれないし小さいかもしれない。しかし歴史の「文脈」から言えば、薄葬令を打ち出した曹魏と交流のあつた卑弥呼の王権が「大きな墓」を一所懸命作るとは思えない。逆に、「大きな古墳」をたくさん作った古墳時代の近畿やマトの勢力は、中国との付き合いいがなかつたことを証明しているのではないだろうか。

(注) 古田島洋一氏の『漢文訓読入門』(明治書院) も、漢文と英文との文法上の類似性を強調している。漢文を学ぶ上で、の好著である。

## 「東京古田会」月例会報告⑨

※文責・新保 高之

### ●二〇二四年十月度 堀留町区民館 参加者・会場 16名、リモート 12名。

第一部 (研究発表と懇談会) 司会は 斎藤事務局長

【研究発表】(ディスカッショhn)・「倭国」と「日本国」(橘高修副会長) (二)

目的: 「二〇二四年度古代史セミナー・パネルディスカッショhn」に向けての予行演習。(二) 内容: ①橘高副会長が三つの論点を説明。(二) 基調講演として國枝氏が「十一月セミナー出席者へのアンケート票を使って要点抽出と自説を紹介。(三) 副会長を皮切りに、会場参加者が各自の意見を発表し、議論に発展。(三) 質疑等: ①論点うち、政権移行と国名「日本国」の使用時期について意見・議論が集中した。結局は、各自が持論を展開しただけで終了に。(発表・議論等百分)

【研究発表】(ディスカッショhn)・「武天皇紀下その十」(二) 対象範囲: 全体のまとめ。(二) 内容: ①主要記事(十一件を抽出)と業績(通説を紹介)、②天皇の行動歴(五四回、飛鳥宮周辺のみの動き)、③詔の様相(対象者を七分類、内容を六分類)、④外交記事(新羅・高麗・耽羅との通交)。(三) 質疑等: ①に関して、「九州王朝弱体化の背景になつた地震の多発(白鳳筑紫や土佐南海などの大地震)を加えて欲しい」との要望、また④に

とめとして、①「はじめに」、②序章「連鎖の原理」、③ミネルバ書房復刊版「はしがき」。(二) 要点: 氏の本書執筆時点での研究方法・姿勢を改めて確認し、三八年後に示された解釈の妥当性を検証。(三) 質疑等: ④に関連して「廢評建郡」で朝鮮半島で使われた「評」は軍事的な役所のことを言つてゐる、との解説があつた。(解説・質疑三〇分)

【読書会】「岩波文庫『日本書紀』」天武天皇紀下その十」(二) 対象範囲: 全体のまとめ。(二) 内容: ①主要記事(十一件を抽出)と業績(通説を紹介)、②天皇の行動歴(五四回、飛鳥宮周辺のみの動き)、③詔の様相(対象者を七分類、内容を六分類)、④外交記事(新羅・高麗・耽羅との通交)。(三) 質疑等: ①に関して、「九州王

【研究発表】A. 「邪馬壹はヤメとも読める」(尾関育三氏) (二) 発表内容: 中國上古音・中古音の解説として、反切という音写の方法(二文字の組合せで、ある文字の語頭子音に次文字の主母音を組み合せ、音を構成するもの)がある。これによれば「邪馬壹」はヤメ、「邪馬臺」はヤメに近い音になる。(二) 質疑等: ①この研究を今後どう発展していくのか。②これを利用した古代地名や人名の見直しは。

③中国古代音の音韻復元可能限度に意見の相違があつた。(三) 感想: 結果だけで終わるのは勿体ない。(発表・質疑三〇分)

【懇談会】①ディスカッショhnと秋の旅行会「語部と歩く東日流」案内を組み合わせ、安彦会長が配布した『和田家文書』に記載された唐書には、なにが書かれているか。について解説。その後に、②当該旅行計画の行程とルートについて説明があつた。

(説明他二〇分)

【研究発表】B. 「古田武彦記念古代史セミナー」(二) 発表内容: ①実行委員長挨拶、②中村修也氏特別講演、③このセミナーがめざすもの、④基調講演及びパネル参加者による論稿発表、⑤ディスカッショhnと中村氏講評、⑥⑤実行委員長講評、などについて簡潔な報告と解説。(二) 質疑等: 会場から「日本中央碑」に関する言及がなかつたことへの疑義が出たが、この碑

第二部 (勉強会と読書会) 司会は新保幹事

●二〇二四年十一月度 新富区民館  
参加者・会場 10名、リモート 8名程。  
藤事務局長

第一部 (研究発表と懇談会) 司会は斎藤事務局長

【勉強会】「古田武彦『失われた九州王朝』その十」(二) 対象: 全体のま

とめとして、①「はじめに」、②序章「連鎖の原理」、③ミネルバ書房復刊版「はしがき」。(二) 要点: 氏の本書執筆時点での研究方法・姿勢を改めて確認し、三八年後に示された解釈の妥当性を検証。(三) 質疑等: ④に

関連して「廢評建郡」で朝鮮半島で使われた「評」は軍事的な役所のことを言つてゐる、との解説があつた。(解説・質疑三〇分)

【研究発表】A. 「邪馬壹はヤメとも読める」(尾関育三氏) (二) 発表内容: 中國上古音・中古音の解説として、反切という音写の方法(二文字の組合せで、ある文字の語頭子音に次文字の主母音を組み合せ、音を構成するもの)がある。これによれば「邪馬壹」はヤメ、「邪馬臺」はヤメに近い音になる。(二) 質疑等: ①この研究を今後どう発展していくのか。②これを利用した古代地名や人名の見直しは。③中国古代音の音韻復元可能限度に意見の相違があつた。(三) 感想: 結果だけで終わるのは勿体ない。(発表・質疑三〇分)

【研究発表】B. 「古田武彦記念古代史セミナー」(二) 発表内容: ①実行委員長挨拶、②中村修也氏特別講演、③このセミナーがめざすもの、④基調講演及びパネル参加者による論稿発表、⑤ディスカッショhnと中村氏講評、⑥⑤実行委員長講評、などについて簡潔な報告と解説。(二) 質疑等: 会場から「日本中央碑」に関する言及がなかつたことへの疑義が出たが、この碑

の古代史の位置づけに意見の隔たりがあるよう感じた。（実質発表・質疑四五分）

【懇談会】会場参加者から「中高年

生に向けた古田史学のわかりやすい古代史の書籍をまとめている」との話があつたが、時間配分の都合で資料配布と説明は次回に。（説明他五分）

第二部（勉強会と読書会）司会は新保幹事

【勉強会】「古田武彦『盗まれた神話』その一」（一）対象は、①いわゆる「初期三部作」について、②目次と各章・節群の概要紹介、③本文（はじめに）、第一章「謎にみちた二書」／第二章「いわゆる戦後史学への批判」／第三章『記・紀』にみる九州王朝」。

（二）説明内容は、③に関して各節群等からその要点を抽出して解説。（三）質疑・意見等として、一九七一年発刊後に「和田家文書」や稻荷山古墳の「金錯銘鉄剣」などで得た知見を踏まえ、先生の解釈等をみていく。（実質解説・質疑二〇分）

前紀～十一年の各年条の主要記事、  
③補注（一四項目の特徴）、④即位前紀（原文・注釈・留意事項・現代語訳（宇治谷編「現代語訳」）を提示して説明。（二）質疑等：八年条の「藤原宮遷居」は遷都や遷宮と表記が異なる。使い分けの有無を確認へ。（実質解説・質疑二〇分）

【第2部】新保高之氏  
\*勉強会 古田武彦論稿より  
『盗まれた神話』その5  
\*研究発表  
【月例会・今後の予定】  
日時：2月22日（土）午後1時～5時  
会場：浜町区民館 洋室5号  
（オンライン参加できます）

●『和田家文書』研究会  
\*日時：3月8日（土）午後2時～5時  
\*会場：古田会HPでお知らせします。（オンライン参加できます）  
\*テーマ：『和田家文書』から見えてくる蒙古襲来  
\*『和田家文書』研究会は奇数月の第2土曜日に開催。（11月を除く）

●東京古田会HPにご意見お寄せ下さい  
H.P.種々のお知らせやトピックスなど好評です。お気づきの点がございましたらご意見お寄せ下さい。  
H.P.種々のお知らせやトピックスなど好評です。お気づきの点がございましたらご意見お寄せ下さい。

●「東京古田会ニュース」  
原稿募集！  
\*懇談会 フリートーキング  
【第2部】新保高之氏  
\*勉強会 古田武彦論稿より  
『盗まれた神話』その4  
\*読書会 日本書紀を読む  
『持統天皇紀』その4  
●3月月例会  
日時：3月29日（土）午後1時～5時  
会場：古田会HPでお知らせします。  
【第1部】  
\*研究発表

発表者：石田泉城氏  
テーマ：「縄文人のDNA」  
\*懇談会 フリートーキング  
(Eメールアドレス)  
saitaka7078@yahoo.co.jp  
川崎市 斎藤隆雄迄

ません。掲載の可否については編集会議で決定させていただきます。

●「東京古田会ニュース」  
原稿募集！  
\*編集後記（斎）  
和田家文書備忘録の「弘前市相馬の長慶天皇陵」は貴重な史料。従来宮内庁は京都嵐山を陵墓としているが明確な資料に基づく比定ではなく近親者が京に戻っている事からの推定の模様。岩木川の氾濫で御所が流された事での「御（五）所川原」の地名を譚。思わず膝を打ちました。

- 20 Furutakai No. 220 Jan. 2025  
- 20 - 持統紀その一（一）対象範囲と内容…  
①持統紀の構成（各年条の行数と記事数、持統紀の後半に特徴）、②即位